

マスペロ「上古中国語の接頭辞と派生」

H. Maspero

千葉謙悟訳

訳者前言

この文章は Henri Maspero, “Préfixes et Dérivation en Chinois Archaïque”, *Mémoires de la Société de Linguistique de Paris* 23, pp.313-327, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion (1935) の邦訳である。最近の上古音研究においてマスペロの業績は再評価される流れにあり、その研究は現在でも参照されているが、この論文はフランス語で書かれていることもあり、日本においては必ずしも利用しやすいものではなかった。

原文にもとからあった注については⁽¹⁾のように記し、訳者の方で付した注については*¹のように記し、ともに本文の末尾に一括して配した。訳者注を与えるまでもない簡単な注記や補足については [] でくくって示している。

現代中国語において、単語は絶対的に不変であり、いかなる派生もあり得ない。それぞれの語は孤立した要素から成り、言うなれば非生産的である。満足のゆく方法で近年再構された中古中国語、西暦で言えば6~7世紀における中国語の状況はすでにそうしたものであった。しかし、上古中国語では全く違っていたのである。即ち、ある派生方法が存在

していたのであり、現代中国語自体に単語がその派生語を形成すべく変化し得た時代の痕跡が残っているのである。

現代語（北京）における一つの顕著な例は、その字形が鮮明さをさらに際立たせるような、特徴的な対立により示される⁽¹⁾。

表 1*¹

声符 畀 lin	{	稟 pin 「穀物を倉庫から出させる」。一般に「与える」
		廩 lin 「穀物を倉庫に入れさせる」「満杯の倉」
声符 監 kien	{	監 kien 「視察する」「見る」
		鑑 kien 「鏡」
		覧 lan 「見る」

現代語におけるいくつかの声符を解説する中で、l-/p-, k-/l- といった交替から、10年ほど前のことであるが、接頭辞による上古中国語の派生の痕跡が

あったのではないかと仮定し、説明もその証明もないものの、この分野の上古の言語の形を再構するに至ったのである⁽²⁾。

表 2

廩 *liâm ₂ * ²	稟 *p-liâm ²
覧 *lám ₂	監 *k-làm ³

これら pl, kl, bl, gl あるいは同種の χl , χm , χn , $\chi \eta^{*3}$, γl^{*4} , γm などといったグループは、後に l, m などの脱落によって接頭辞のみが残存することとなった。すなわち $*p-liâm > piâm$ のように。

最近カールグレン氏もまた全く新しい理論を提示した⁽³⁾。

「声符と形声文字の間の音声的類似という厳格な要求を知ることにより— kl:l が望ましい交替として受け入れられているが— 「各」 klâk : 「絡」 lâk と仮定できるとはそんなにありそうなことではないようだ。実のところ、上古中国語で l に始まる語は何百とあるが、l- の語が k- の語の声符として働く (「立」 li : 「泣」 kî^{*5}) というのは幾つかの孤立的な例しか私は知らない。従って、例えば諧声系列「各」にあって、形声字「絡」(lo) のように声符「各」(ko) は上古音で軟口蓋音声母を持っていたと仮定するのはもっともなことである。しかし、ここでは二つの可能性がある。

α : 「各」 kâk (現代音 ko) :

「絡」 klâk (現代音 lo)

β : 「各」 klâk (現代音 ko) :

「絡」 glâk (現代音 lo)

前者のような、ある系列における固定の上古音声母を再建する権利はない。ただ、その系列のいくつかの語では kl- あるいは gl- が存在する可能性があることに留意しておかなければならない。正確な音価は、おそらく将来の中国系諸言語 (des langues sinitiques) の比較研究によって得られるであろう」

この段落は彼による新しい理論の全体を了解するにはいささか簡潔に過ぎる。しかし、カールグレン氏は親切にも彼の考えを書信にて私に以下のごとく詳しく説明してくれた。

「私の立場は以下の通りです。つまり三つの可能性、三つの可能な説明方法があります。

α . 「各」 kâk : 「絡」 klâk

β . 「各」 klâk : 「絡」 glâk

γ . 「各」 klâk : 「絡」 lâk

この三種類から三番目の方法をほとんどありえないものとして除きます。「立」:「泣」(声母 l

の声符が声母 k の語を表すのに使われている、など) のような例は極めて稀ですから。こうして、最初の二つだけが残ります。私が言いたかったことは、 α が正しいのであれば β は誤りで、 β が正しいのであれば α は誤りだということでした。中国語の事実 (私の辞書は厳密に中国語の事実のみに限られていました) は、 α と β からきっぱりと一つを選ぶということを私に許しませんでした。従って、ほぼすべての声類において私は単純に「この声類には上古の幾つかの部分で kl- または gl- があった」と設定しました。すると四番目の可能性も出てきます。

δ . 「各」 kâk : 「絡」 glâk

上古の l- (「絡」「覧」など) という形は常に gl- から派生したと仮定すると、複数のタイプを考えることができます。

「各」 kâk, 声符: 「絡」 glâk

あるいは 「各」 klâk : 「絡」 glâk

「監」 kam, 声符: 「覧」 glam

あるいは 「監」 klam : 「覧」 glam

そしてこれらすべての声類の間に完全な平行性を仮定する必要はないでしょう。というのは、そこに二つのタイプがあり得るからです。

「各」 kâk : 「絡」 glâk

しかし 「監」 klam : 「覧」 glam

私の考えではこの最後の可能性もあると思いますが、深くなりすぎるのを望まないで説明はしません。私の辞書の目的としては、この声類の上古の幾つかの部分では kl- あるいは gl- があったと言えればそれで十分だったのです…」

この理論の完全な巧みさおよび創意と同時に、それが問題を解決しようとする際もたらずであろう複雑さを見て取ることができる。つまりそれぞれの諧声系列が個別的な問題として扱われねばならないということである。中国語の事実は、まさにカールグレン氏が述べたように、さまざまな「可能性」の中から一つを選ばせるには十分ではないのであるから、それぞれの特定の状況の解決は専ら中国語と同系の諸言語との比較によるのである。

彼の理論は受け入れられるだろうか? カールグレン氏がそれについて何度も主張したような、彼の理論の際だった特徴の一つは、上古中国語の声符選択の際の子音声母の著しい重要性にある。古代中国

の書記者たちは、ある語を示すために声符を選ぶ際、-l- 介音の存在の有無に関心を持たなかったが、特に声母と韻母には関心があった（彼らは介音 -i- や -u- を全く考慮しなかったからである）。従って「各」が g [-l-] âk のようにしか考慮されなかったので、「各」 kâk は「絡」 glâk の声符として働いていたのである。

さてカールグレン氏の仮説が最大の困難に直面するのはまさにこの点についてである。その仮説は実際のところ、多くはないが重要ないくつかの点で矛盾に陥ってしまう。今日では、l 以外の、一種類にとどまらずむしろ複数の種類の声母を見せる語と声符が存在する。以下に若干の例を見てみよう。

表 3

諧声符	l 声母	唇音声母	喉音声母	口蓋音・歯音声母	摩擦音声母
繼 l'üien ₁	繼 luán ₁	變 p'ien ³ 蠻 mən ₁ 簪 man ₁			
廖 lieu ₃	廖 liəu ₁ 廖 láu ₁	廖 p'au ¹ 廖 miəu ₃ 廖 m'ieu ₄ ^{*6}	廖 kàu ¹ 廖 kiəu ¹ 廖 χəu ¹	廖 čieu ¹	
尙 liâm ₁	稟 l'îâm ₂ 廩 l'îâm ₂ 慍 liâm ₂	稟 p'îâm ²	慍 g'îâm ₃		
婁 ləu ₂	樓 ləu ₂		婁 g'iu ₂ 屨 k'iu ³ 泣 k'iq̄p ⁴		數 ʃiu ² 藪 səu ²
立 l'îp ₄				靈 č'îp ⁴	
龍 l'ióŋ ₁	龍 l'ióŋ ₁ 龍 luŋ ₁	龍 mòng ₁ 龐 bòng ₁		龍 č'üióŋ ² 寵 č'üióŋ ² 的 tiek ^{4*7} 酌 tieu ¹	
勺 ziək ₄	炮 lieu ₃	炮 bàu ₁ 豹 páu ³			杓 ziək ₄
卯 ? ⁽⁴⁾	窳 làu ₁	窳 p'au ³	窳 kàu ³		
里 li ₂	裡 l'î ₁ 裡 l'î ₁	埋 mài ₁	裡 k'iq̄ ² 裡 k'uái ¹ 閣 kák ⁴	裡 tài ¹	裡 zi ₂
各 kák ^{4*8}	絡 lək ₄	貉 p'ák ⁴			

これらの事実はすべて、声母選択の上で -l- に先行する要素を考えなければならない理論では説明できない⁽⁵⁾。個々の理由のために一つ一つ（数はそんなに多くない）説明することが可能であるのは確かである。しかしそれではさしたる発展性はない。最初の諧声系列では、p : m という交替は「必」 piēt : 「宓」 miēt,あるいは「百」 pok : 「陌」 mok などといった交替の類推として説明されよう。事実、鼻音声母の語は声符が閉鎖音声母を持つ系列中に散発的に現れる（その逆もまた正しい）。一方「埋」 mài₁ は声符がないために除外されるであろう。「埋」は「田」村の“原野”と「土」村の“土地”に、さらにもう一度「土」「土地」が加えられたもの（No.529, p.174）である。さらに、「龐」 bòng “建物”は「广」

“屋敷”と「龍」「皇帝の」から成ると説明され（No.585, p.188）,「寵」 č'üióŋ² “気に入った”は“部屋”「宀」と“皇帝の”「龍」から成る（同上）と説明される。これはどちらの場合も「龍」を声符と考えている『説文』の作者許慎よりも表意文字化を進めるものである。その上「埋」に代えて「裡」 li “野生の猫”が声符として与えられている「藪」という字を記している。しかし、まだ多くの諧声系列が触れられぬままであるこうした説明はそんなに大きな利点を持たない。事実、「寵」の各々の単純な諸要素は意味のために用いられているのであって、「寵」はその要素のどれも発音を表すものではない字なのであると強いて説明されうるとしても、「龍」という字が三つの異なった意味のためにそれぞれで l,

ǎ, m という異なった声母を示す発音を有すると認める以上、その点についてはいかなる説明も不可能である。「龍」という字が l, ǎ, m という声母を持つ字において用いられているのは専ら音を示すためであるということは明らかである。しかるに「龍」が例えば上古で blión₁ であり、b のゆえに bòn₁ (および mòñ₁) と発音する語を示すために用いることができたとするならば、「龍」は声母 ǎ を持つ ǎlión₁ という語を示すために使うことがなぜできたのであろうか。同様に、もし「廖」lieu が上古で g'leg⁽⁶⁾ であって、その g- のゆえに上古で kag あるいは klag であったであろう「膠」に使うことができたとするならば、声母が m である「謬」やとである「廖」に対してなぜ用いられ得たのであろうか。あるいは冒頭の例に話を戻すと（中古音で閉鎖音を

もつ声符に関わるため特に興味深い例である）、もし諧声符「各」の系列において中古音と現代音で声母 l を持つ語形を上古では軟口蓋音を持っていたと解釈するならば（仮説 $\alpha \cdot kâk > kâk : klâk > lâk$ 。仮説 $\beta \cdot klâk > kâk : glâk > lâk$ ）、「謬」*⁹p'âk “飛ぶ” の声母 p' はどう説明するのであろうか。

対して、私が先に上古の語についていくつかの再構を試みた理論による仮説はこれらすべての例を説明する。私の考えでは、それは実のところ同じ諧声符を使って書かれた様々な語の間の連繋を基礎づける l 介音または声母であり、l に先行しうる要素は考慮しない。上古中国語において先の表の語の音価であったと思われるものを示した以下の表は、同じ諧声符がこうしたさまざまな語に対してどのように使われうるかを明確に示すだろう。

表 4

諧声符	l 声母	唇音声母	喉音声母	口蓋音・歯音声母	摩擦音声母
繼 *luià ₁	樂 *luán ₁	變 *p-liàn ³ 蠻 *m-làn ₁ 蠻 *m-lan ₁			
廖 *leug ₃	廖 *lôu ₁ 廖 *láu ₁	謬 *m-lôug ₃ 謬 *m-lôug ₃	膠 *k-làu ¹ 膠 *χ-làu ¹	廖 *ǎ-lôu ¹	
畛 *lôm ₂	稟 *lôm ₂ 廩 *lôm ₂ 慄 *lôm ₂	稟 *p-lôm ²	慄 *g-lôm ₃		
婁 *lǝu ₂	樓 *lǝu ₁		婁 *g-liu ₂ 婁 *k-liu ³ 泣 *k'-löp ⁴		數 *ʃ-liu ² 藪 *s-lǝu ₂
立 *löp ₄				靈 *ǎ-löp ⁴ 龍 *ǎ-lión ² 寵 *ǎ-lión ²	
龍 *lión ₁	龍 *lión ₁ 龍 *luñ ₁	龍 *m-lòñ ₁ 龐 *b-lòñ ₁			
卯 ?	窳 *lǝu ₁	窳 *p'-lǝug ³ * ¹⁰	窳 *k-lǝug ³		
里 *li ₂	裡 *li ₁ 裡 *li ₁	埋 *m-lài ₁	裡 *k'-li ¹ 裡 *k'-luái ¹	裡 *t-lài ¹	裡 *z-li ₂
各 *k-lák ⁴	絡 *lák ⁴ * ¹¹	裕 *p'-lák ⁴	閣 *k-lák ⁴		
勺 *ʒ-liàk ₄	炮 *bǝug ₃	炮 *b-làu ₁ 豹 *p-láu ¹		的 t-liàk ⁴ 酌 t-liàu ¹	杓 ʒ-liàk ₄

上の例よりはよく見られ、声母が雑多であるように見えるが、l や m は全くないある諧声系列の不整

合を同様に説明することができる⁽⁷⁾。

表 5

縵 *k-lɔŋ ¹	kɔŋ ¹	*p-löŋ ¹	piəŋ ¹		
豨 *χ-luán ¹	χuán ¹	*p-liàn ¹	p'ien ¹		
屈 *k'-luöt ⁴	k'üiät ⁴	咄 *p'-luət ⁴	p'uət ⁴	出 *tš'-luët ⁴ *12	tš'üiët ⁴ *13
亨 *χ-lɔŋ ¹	χɔŋ ¹	烹 *p'-lɔŋ ¹	p'ɔŋ ¹		
公 *k-luŋ ¹	kuŋ ¹			頌 *z-lión ₃	zióŋ ₃
谷 *k-luk ⁴	kuk ⁴			俗 *z-liók ₄	ziók ₄
血 *χ-luet ⁴	χüiet ⁴			恤 *s-luet ⁴	suiet ⁴

かくて lin : pin に類する交替を示す諸諧声系列をも解釈することができる。それらは非常に異なった

声母を伴って数多くある。以下に幾つか例を挙げる。

表 6

l 声母の諧声符					
林 *löm ₁	l'âm ₁	禁 *k-löm ³	k'âm ³		
立 *löp ₄	l'âp ₄	立 *k-löp ⁴	k'âp ⁴		
		泣 *k'-löp ⁴	k'âp ⁴		
录 *luk ₄	luk ₄			剥 *p-lòk ⁴	pòk ⁴
婁 *lɔu ₂	lɔu ₂	婁 *g-liu ₂	g'iu ₂		
		履 *k-liu ³	k'iu ³		
呂 *lió ₂	l'ió ₂	莒 *k-lió ²	k'ió ²		
吏 *li ₃	l'í ₃			使 *š-li ³	š'í ³
麗 *lei ₃	lei ₃			曬 *š-lài ³	š'ài ³

表 7

鼻音声母の諧声符			
麻 *mà ₁	mà ₁	磨 *χ-muiq ¹	χ'üi ¹
毛 *máu ₁	máu ₁	耗 *χ-máu ³	χáu ³
每 *muái ₁	muái ₁	海 *χ-mái ²	χái ²
能 *nêŋ ₁	nêŋ ₁	熊 *γ-nuöŋ ₁	γ'iuŋ ₁

表 8

閉鎖音声母 (k, g, p, b) の諧声符			
各 *k-lák ⁴	kák ⁴	落 *lák ₄	lák ₄
京 *k-liŋ ¹	kiŋ ¹	涼 *14	liáŋ ₁
兼 *k-liàm ¹	k'iem ¹	廉 *liàm ₁	l'iem ₁
監 *k-làm ¹	kàm ¹	覽 *lám ₂	lám ₂
竿 *k-lòŋ ³	kòŋ ³	隆 *liuŋ ₁	l'iuŋ ₁
竿 *b-iuŋ ₁	b'üiuŋ ₁	瘡 *liuŋ ₁	liuŋ ₁
果 *k-luá ²	kuá ²	裸 *luá ₂	luá ₂

表 9

摩擦音声母の諧声符			
獻 *χ-ŋion ³	χion ³	讞 *ŋian ₃	ŋien ₃
化 *χ-ŋuà ³	χuà ³	訛 *ŋuá ₁	ŋuá ₁
黒 *χ-mâk ⁴	χâk ⁴	墨 *mâk ₄	mâk ₄
畜 *χ-liuk ⁴	χ'iuk ⁴	*č'-liuk ⁴	č'iuk ⁴
血 *χ-luět ⁴	χ'üiët ⁴	恤 *s-luët ⁴	suiët ⁴
亘 *s-luiàn ¹	suien ¹	桓 *γ-luán ₁	γuán ₁
宣 *s-luiàn ¹	suien ¹	愴 *χ-luion ³	χ'üion ³
需 *s-ñiu ¹	siu ¹	儒 *ñ-iu ₁	ñiu ₁

タイ諸語 (les langues tháí) との比較はある程度確認に資するであろう。

表 10

中国語		シャム語 ⁽⁸⁾	
上古	中古		
剥 *plòk ⁴	pòk ⁴	plòek ₁	“木・果物の皮”
蠶 *pluióŋ ¹	p'üióŋ ₁	[*blöŋ>] böŋ ₃	“ミツバチ” ⁽⁹⁾
變 *pliàn ³	p'ien ³	plien ₁	“変える”
昏 *χmuên ¹	χuên ¹	hmŭn ₂	“薄暗い”
皇 *γluáŋ ₁	γuáŋ ₁	hluáŋ ₂	“王の”
黄 *γluáŋ ₁	γuáŋ ₁	hlöáŋ ₂	“黄色”
放 *pluiáŋ ³	p'üiáŋ ³	plöáŋ ₃ (plöŋ)	“置く”
慄 *kluá ²	kuá ²	kla ₃	“勇敢な”
江 *klòŋ ¹	kòŋ ¹	glòŋ	“運河” ⁽¹⁰⁾
孫 *sluên ¹	suên ¹	hlan ² (hlón ²)	“孫”

中古および現代中国語の l, m といった声母は保たれた上古中国語の声母をよく反映しているが, -l-, -m-, -ŋ- などといった上古の介音は先行する声母が常に無声音, 鳴音, 閉鎖音, 摩擦音, 喉音, 唇

音, 歯音, 口蓋音を保つものに対して, 中古音や現代音では常に失われるとみなす, という私の考えに上のすべては合致している。

表 11

*kl > k ; *k'l > k' ; *gl > g
*pl > p ; *p'l > p' ; *bl > b ; *ml > m
*čl > č ; *č'l > č' ; *jl > j
*χl, *χm, *χŋ, *χn > χ
*γl, *γm, *γŋ, *γn > γ
*sl, *sm, *sŋ, *sn > s
*zl, *zm, *zŋ, *zn > z

これらは何を表しているのだろうか? タイ諸語との比較によって, 声母の最初の成分がかなり不安定であり, 片方にあるものがもう一方にも常に見

だされるというわけではないことが認められる。例えば, タイ諸語にはない音素を l, m の前に持つのは中国語である, という時がある。

表 12

中国語			シャム語	
	上古	中古		
血	*χ-luě ⁴ * ¹⁵	χ'üiet ⁴	lœd ₃	“血”
風	*p-lòm ¹ * ¹⁶	p'üiuŋ ¹	lœm	“風”
降	*k-lòŋ ³	kòŋ ³	lœŋ	“下る”

またある時は逆に、タイ諸語が中国語にない音素を持っている。

表 13

中国語			シャム語	
	上古	中古		
籠	*luŋ ₁	luŋ ₁	krœŋ	“鳥かご”
藍	*lám ₁	lám ₁	gram	“インディゴ”
萬	*muioŋ ₁	m'üioŋ ₁	hmœn	“10.000”
六	*liuk ₄	l'iu ₄	[*hrœk>] hœk	“6” ⁽¹¹⁾
聯	*liàn ₁	l'ien ₁	hlién ₂	“続きの”
廉	*liàm ₁	l'iam ₁	hliem ₁ (hlém ₂)	“角(点)”

かかるヴァリエーションにおいて異なった音声的発展の結果と理解することはできない。というのは、この二つの言語で保存されるのは一般に語頭音（タイ諸語における h を除く）⁽¹²⁾であり、脱落するのは流音か鼻音である。従って語幹に加わったり語幹から脱落したりする要素、ある状況下で語の意味を修正するのに用いられたり、派生手段としての役割を果たしたりする接頭辞であると理解するに至るのである。ただ残念なことに、識別できる形で存在している語への派生を関係づける状態には、ほとんど

全くといってよいほどない。しかし、関係づけることのできる場合がいくつかある。それぞれの接頭辞に一つの特定の意味を与えるのは不可能ながら、以下のことに気づく。即ち単純に意味に対して変更をもたらす接頭辞は、それぞれに固定の役割もそのグループ全体に対する固有の振る舞いも識別できないものの、いくつかの場合において一種の使役動詞、或いはより一般的には他動詞に変えるため名詞や実形容詞に適用されるようである。

表 14

耗	*máu ₁	*máu ₁	“尽くす”		*χ-máu ³	χáu ³	“空にする”
像	*lôm ₁	*l'îm ₁	“寒い”		*χ-lîm ³	χîm ³	“冷やす”
凌	*lœŋ ₁	*liœŋ ₁	“凍った”“氷”	冰	*p-liœŋ ³	p'iœŋ ³	“冷やす”“凍らせる”
昧	*muái ₃	muái ₃	“薄暗い”	晦	*χ-muái ³	χuái ³	“薄暗い”
玉	*ŋiók ₄	ŋiók ₄	“翡翠”	玉	*s-ŋiók ⁴	siók ⁴	“翡翠をカットする”

逆に、他の場合では接頭辞はある動詞を動詞性の名詞の一種に変えるようである。

表 15

覧	*lám ₂	lám ₂	“見る”	鑑	*k-lám ³	kám ³	“鏡”
擄	*lu ₂	lu ₂	“捕らえる”“囚人”	俘	*p'-liu ¹	p'iu ¹	“囚人”“奴隷”

時折、意味の特殊化も起こる。

表 16

窳	*làu ₂	làu ₂	“穴”		*klàug ³	kàu ³	“穀物庫”
					*p-làug ³	p'au ³	“ワイン倉”“発酵する”
卵	*luán ₂	luán ₂	“鳥の卵”		*k-luân ¹	kuân ¹	“魚の卵”
覧	*lám ₂	lám ₂	“見る”	監	*k-làm ³	kàm ³	“視察する”
令	*lōŋ ₂	liōŋ ₂	“命令する”“命令”	命	*m-lōŋ ₃	miōŋ ₃	“職を授ける”
廩	*lōm ₂	liōm ₂	“サイロ”“しまう”	稟	*p-lōm ²	p'iōm ²	“サイロから出させる”
昫	*luk ₄	luk ₄	“ひっかく”“切る”	剥	*p-lòk ⁴	pòk ⁴	“皮を剥く”
墨	*môk ₄	môk ₄	“インク”	黒	*χ-môk ⁴	χôk ⁴	“黒” ⁽¹³⁾

接頭辞化によるこの派生システムは古代中国で同時に使われていた多くの派生法の中の一つでしかない。

表 17

1. 声調変化による派生						
冠	*kuán ¹	kuán ¹	“縁なしの帽子”	*kuán ³	kuán ³	“成人の帽子を被る”
王	*'uián ₁	'uián ₁	“王”	*'uián ₃	'uián ₃	“統治する”
相	*sián ¹	sián ¹	“互いに”	*sián ³	sian ³	“助ける”
先	*sen ¹	sien ¹	“前に”	*sen ³	sien ³	“先行する”
鹽	*'iām ₁	'iem ₁	“塩”	*'iām ₃	'iem ₃	“塩をふる”
種	*tsióŋ ²	tsióŋ ²	“穀物”	*tsióŋ ³	tsióŋ ³	“種をまく”
分	*puōn ¹	p'uiōn ¹	“共有する”	*puōn ³	p'uiōn ³	“部分”
任	*ñōm ₁	ñiōm ₁	“～できる”	*ñōm ₃	ñiōm ₃	“負担”
知	*čiq ¹	či ¹	“知る”	*čiq ³	či ³	“学識ある”
鑑	*klām ¹	kàm ¹	“監督する”	*klām ³	kàm ³	“監督”
使	*šli ²	ši ²	“送る”	*šli ³	ši ³	“使者”
傳	*juian ₁	jüien ₁	“伝える”	*juian ₃	jüien ₃	“ならわし”
呼	*χu ¹	χu ¹	“呼ぶ”	*χu ³	χu ³	“叫ぶ”
取	*ts'iu ²	ts'iu ²	“取る”	*ts'iu ³	ts'iu ³	“具体化する, 扱われる”
食	*džök ₄	džiök ₄	“食べる”	*žig ₃	žig ₃	“食べさせる”
飲	*'öm ² *17	'iām ²	“飲む”	*'öm ³	'iām ³	“飲み物を与える”
去	*k'ió ²	k'iu ² *18	“出発する”	*k'ió ³	k'iu ³	“出発させる, 追い立てる”
來	*lái ₁	lái ₁	“来る”	*lái ₃	lái ₃	“来させる, 引き寄せる”

表 18

2. 声母の有声/無声の交替またはその逆による派生（普通は声調の交替を伴う） ⁽¹⁴⁾						
見	*ken ³	kien ³	“見る”	*yen ₁ (gen ₁ ?)	yien ₁	“見える”
朝	*čeu ¹	čieu ¹	“朝”	*jieu ₁	jieu ₁	“謁見”
校	*kàu ³	kàu ³	“調べる”	*yào ₃ (gào ₃ ?)	yào ₃	“学校”
解	*kài ²	kài ²	“分ける”	*yài ₃ (gài ₃ ?)	yài ₃	“ほどく”
比	*pi ²	p'i ²	“比べる”	*bi ₃	b'i ₃	“一緒に置く”
番	*p'uiōn ¹	p'üiōn ¹	“野生の”	*buion ₁	b'üiōn ₁	“野生動物の爪”
閒	*kàn ³	kàn ³	“真ん中の空間”	*yàn ₃ (gàn ₃ ?)	yàn ₃	“空いている, 暇な”

表 19

3. 母音の変化による派生 ⁽¹⁵⁾					
・ a-e :					
見	*ken ³	kien ³	“見る”	看	*k'án ¹ k'án ¹ “注意して見る”
辨	*ben ₃	bien ₃	“見分ける”	班	*pàn ¹ pàn ¹ “分配する, 整理する”
・ á-à :					
含	*yám ₃	yám ₃	“口に含む”	銜	*yám ₃ yiem ₃ “轡”
・ a-ia :					
跛	*pá ²	pá ²	“びっこをひく”		*piq ³ p'i ³ “体を片足に傾ける”
破	*p'á ³	p'á ³	“壊す”	披	*p'iq ² p'i ² “壊れる”
・ a-ö :					
行	*yöŋ ₁	yíŋ ₁	“歩く”		*yáŋ ₁ yáŋ ₁ “列”
分	*puön ¹ *19	p'üiŋ ¹	“共有する”	判	*p'án ³ p'án ³ “半分にける”
				半	*pán ³ pán ³ “ ”
・ â-ö :					
奔	*puân ¹	puân ¹	“走る, 逃げる”		*puön ³ p'üiŋ ³ “逃亡中である”
・ u-o, -ua :					
賈	*ku ²	ku ²	“商人”	價	*kò ³ *20 kà ³ “値段”
孤	*ku ¹	ku ¹	“孤児”	寡	*kuá ³ kuá ³ “未亡人”

否定詞のグループは交替について一連のよき例を示してくれる。まず円唇母音の二つの平行するペア

はお互いほとんど声母による違いしかない。

表 20

否	*pōu ²	p'ïəu ²	非	*puiö ¹	p'üi ¹	{	弗	*puöt ⁴	p'üiöt ⁴
							不	*puât ⁴	puât ⁴
無	*müiu ₁	m'üiu ₁	未	*muö ₃	m'üi ₃		勿	*müöt ₄	m'üiöt ₄

そして、振る舞いが異なる母音を持つもう一つのペアがある。

表 21

靡	*miq ₁	m'i ₁	莫	*mák ₄	mák ₄	蔑	*miat ₄	m'iet ₄
---	-------------------	------------------	---	-------------------	------------------	---	--------------------	--------------------

これらの手段の中で、古代中国において最も重要で唯一活発だったのは声調の交替であるようだ。接頭辞化による派生は知りうる最も早い段階には早くも消失しつつあった。接頭辞の固有の意味は、もし当時そんなものを有していたとすれば、完全に混同されているように見えるほどにまで曖昧になってしまった。私が思うに、その理由は中国語で複子音声母への反発が徐々に大きくなってきたことにあると思われる。我々が把握しうる最も早い時期ですでに[子音の]第二要素は l, m, n, ñ, ŋ しか許容しな

くなっていた、つまり接頭辞の使用を非常に限られた場のみに退けたのである。どんなに古い文献に現れようとも、接頭辞化のシステムはすでに殆ど残骸でしかなくなっていた。しかしその残骸の存在によって、接頭辞化は古代のある時期において非常に重要な役割を果たして、中国語はそれを接頭辞が閉鎖音と同様にすべての声母の前に立ちうる現代チベット語のように認めていたということを垣間見ることができる。私見では、声調の交替による派生システムの起源を研究しなければならないのはそうい

うことである。つまり声調交替は当初、ある時は接頭辞の存在に⁽¹⁶⁾、またある時は無声音声母を有声音声母に、またはその逆に変換するのに付随する二次的な現象であった。しかし接頭辞が摩擦音声母の前に現れなくなり、接頭辞による派生がその広がりと重要性を失うにつれて、二次的であったものが主要なものとなり、ついにはそれ自身で派生を行うに十分なものとなったのである⁽¹⁷⁾。上古中国語における接頭辞による派生と接頭辞の役割を把握するのが難しいとすれば、それは書記法の発明が新しい時代を反映したころには、早くもすでに全き衰退にあるような手段だったからであることに関係するのである。

原注

- (1) 現代の発音（北京）を記したこの表中の7語を除き、中国語の単語は中古音と上古音という二つの音形のみが与えられる。上古音には常にアステリスクを付す。スペースを空けた字はカールグレン氏から借りた再構形と転写であり修正せずに複製したもの、あるいは彼の体系に従って構成したものであることを示す。かかる個別の場合および、カールグレン氏の最近の成果の影響を受けて細部を幾つか修正した以外、中古音に対する私の再構は私の論文「唐代長安方言考 (Dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang)」(B. É. F. E. - O., XX (1920), II) に従う。上古音についていえば、その再構は中古音に対するものよりも自然と不確実性なものであるから、本論で問題となるのは特に語の声母あるいは声類の部分であるため、それらのみをかろうじて与えることができるにすぎない。しかし、採用された再構形をここで証明する余地はないものの、完全な語形を示した方が好ましいと私には思われた。実際のところ、私見では母音組織であっても個々の細かい部分では疑わしさが残るが、その大枠においては決定されているようだ。ü, ü をそれぞれ ö, ɔ (ä は ɔ の短音) とし、子音声母の口蓋化を記号「|」によって表し、有気音を記号「|」で表し、ki, k'i, k, k'i のように表記した以外、転写法は私の先の論考のそれである。
- (2) 類似の諸例については同前書 p.68, 94 などを参照（しかし p.14 では pliâm における l の存在を認識していなかった）。
- (3) B. カールグレン『上古音分析辞典 (Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese)』序, p.31。
- (4) 声符単独での発音ははっきりしない。複数の辞書では普通 'iəu としているが、この字形が「酉」'iəu の異体字に似ていることを考慮しているからである。しかしそれらを区別をしなくてよいのかどうかについてははっきりしない。今日の同形字「卯」máu との関連もおそらくはないであろう。
- (5) 「嚮」は5つの異なった意味につき5つの発音がある。1.ləu, “多弁な”, 2.p'əu “空威張りする”, 3.m'iəu “嘘をつく”, 4.k'iəu “鳥の鳴き声”, 5.ɣəu “出しゃばる”。同様に「龍」にも三つの発音がある。1.lióng “龍”, 2.mòŋ “黒っぽい”, 3.čüióŋ “愛する, 好む”。「窳」には三つの発音がある。1.ləu, “くぼんだ, 深い”, 2.p'əu “発酵する, 酒蔵”, 3.kəu “サイロ, 穀物庫”。「榷」には四つの発音がある。1.li, “作物を運ぶ籠”, 2.k'i² は「枸榷」kəu¹-k'i² という形で“クコ”, 3.と 4. は t'ai¹, zi³ (一般的に後者だけが用いられる) “唐楸”。
- (6) カールグレン氏は -i, -t や -u, -i, -k で終わる語を記すのに一度に多くの声符が使われていることを説明するため、軟口蓋音と歯音の韻尾 (-k, -t とは異なる -g, -d) の存在を仮定するという非常に優れた考えを思いついた。しかし中古の -u と -i を単純に上古のかかる -d や -g からの変化の結果とみなすとき、私はその説に賛同できない。先行する母音とは関係なしに異なった調音を持つ -g 韻尾三つが存在するという彼の仮説（例えば「浩」*yág < yáu における軟口蓋音的な -g に対し、「畫」*yúág < yuái における軟口蓋音的な -g) は、ほとんどその場しのぎでしかなく、まずありそうにない。-u : -k の交替について、韻尾が -k の時はほぼ全ての声符が唇音性の母音を有している。筆記者が声符を選択する際、母音組織について常に難解だったというわけでは恐らくなかったにも関わらず、何も理由がないならばこれらの場合においては唇音性の母音に対する著しい偏向を見せることについてはよく分かっていない。同様に、-i : -k の交替について、-k の前では口蓋性の母音を持つ語、あるいは少なくとも二重母音の中で口蓋的な要素を持つ語、すなわち e, ei, ö, ia の方が好まれた（これはむろん絶対的な規則ではなく、どちらの場合でも例えば a や ɔ のような他の母音が見られるが、しかし重要なのはそれが同様に、母音組織がしばしば不規則性をもたらすようなほぼすべての諧声系列の中にあるということだ）。現代語の二重母音に似た、最後に唇音的あるいは口蓋的な要素を持つ複合母音は、-g や -d の脱落以前にこれらの語の中にすでに存在していたと私は考える。以上が、以下のように再構した方がよいと信ずる理由である。

「告」*káug³ > káu³ (カールグレン氏のような *kâg ではない)

「乍」*džəg³ > džə³

「阨」*ái > 'ái (âg ではない)

-d, -g の脱落以前からこの種の二重母音が存在していたとすれば、通常の規則に反して去声が見あたらないというケースを説明しうるだろう。つまり声符は去声で -g (あるいは -d) 韻尾を持つ語（および入声で -k または -t 韻尾を持つ語）を示すのに加えて、-g や -d に先行するものと同じ母音あるいは二重母音とを持つ、子音韻尾のない語を示すのに使われていたのである。例えば *liuk⁴ < l'iu⁴, *lög³ < l'ig³, *leug³ < lie³ という三種の読音を持つ系列 546 「寥」は -g 韻尾のない「寥」*leu¹ < lie¹ にあって、或いはまた「嫪」láu³ < láu³ にあっては声符として用いられ、その結果 -g を持たない「醪」láu¹ < láu¹ にあっては声調表示のために用いられた。
- (7) これらの例から引用した三番目の声符「出」は「榘」nuə⁴ において声母 n という読音を持つが、n は声符「良」l'ian¹ : 「娘」nian¹ や、l'ig¹, ləu¹, nəu¹, g'ig¹ と読む「膠」(声符は lie¹) におけるような（方言に由来する？）l のヴァリエントであるように私には思われる。
- (8) タイ諸語との比較は（ほとんど知られていないアホム語を除く）他のすべての言語では失われた kl-, pl- などの子音グループを唯一保存してきたシャム語を参照して

行った。理論から見れば問題なくとも実際には不便なしとはしないこの言語体系が唯一可能なものであった。タイ諸語との比較はまだ萌芽期にあるので、タイ祖語の個々の再構はさまざまな言語の長大な単語リストと広範な議論を求めている、そのすべてはここで扱った声類をシャム語のみが独自に保存しているだけより適さないものとなろう。提示することが必要と思われたタイ祖語のいくつかの語形はブラケットで囲み、シャム語の語形の前にアスタリスクで示した。シャム語は文字に従って転写されている。現代シャム語の発音では有声音が無声有気音になった。例えば glŋ 2 の発音は k'ŋ 2。また流音あるいは鼻音に先行する h は発音しない。例えば hluaŋ 2 の発音は luŋ 2。

- (9) シャム語は r を失っているが、アホム語の brŋ 2 や白タイ語の pɛŋ 2 (ɛ はシャム語では p'rom “頭髪”である pɛ'om における古代の r または l の代替物である) はタイ祖語における (短い ɔ とともにある) r の存在を明らかに示している。
- (10) この語は分散区域が重要な小さな単語のグループに属する。それは類縁関係の可能性のある語族である中国語、タイ諸語、安南語、チベット・ビルマ諸語だけではなく、互いに恐らく類縁関係にあるが [中国語などの] 先述した諸語とは何の関連もない語族であるモン・クメール諸語、チャム語、チャム語と縁続きのモイ諸語、そしてアチェン (スマトラ島) の言語にまで見える。東南アジアのさまざまな先史時代の文明間で非常に古い時代の文化交流がきつとあったのであろう。
- (11) この語は今日のシャム語、ラオ語、黒タイ語で hŋk だが、テン族 (T'eng。ラオス、トンキン、アンナンの境であるマイソン (Mai-son) とカムクット (kham-khu't) の間で小グループとして分散したクメール語の人々) はその語を hrŋk という形で、3 から上の数をすべて古代にラオ語あるいは黒タイ語から借用した。一方、ライチャウ (Laichau。トンキン) 地区のヤン族 (Yang) は、その言語が本来テン族と類縁関係にあるが、そこには白タイ語からの借用が多くある。ヤン族は [6 のことを] ruk という (ルフェーヴル = ポンタリス (Lefèvre-Pontalis) 「インドシナ北部の若干の部族について (Notes sur quelques populations du Nord de l'Indo-Chine)」『アジア学報 (Journal Asiatique)』VIII, XIX (1892), p.260)。タイ諸語自体の間でも -r- という形の痕跡がある。すなわち、アホム語でその語は rok と書かれ、パボ語 (pa-po) では hrok と書かれていた (『華夷訳語』大英図書館写本)。従ってタイ祖語 hrŋk > シャム語 hŋk と再構するのに何の困難もない。
- (12) ビュルネイ (M. J. Burnay) とクーデ (M. G. Coedès) は「スコタイ時代の古シャム語声母の声調について (Note sur les tons des initiales du vieux siamois à l'époque de Sukhodaya)」『シャム協会報 (Journ. Siam. Soc.)』XXI (1927), 2, p.108 とその続編で、シャム語の hn, hm, hl, hr などといった表記法を、二つの声調のクラスにおいて、閉鎖音に倣い鼻音や流音声母を配分するための単なる書記上の手法とみなし、従って表記において声調を同じ記号で表すことを可能にしているとみなしている。それゆえ h- は実際には決して発音されなかったであろうし、l, m, n, ŋ などは常に現代のような真の子音であったとする。ここはこの問題については議論する場ではない。しかしカ (Kha) 方言の黒タイ語あるいはラオ語の借

用語がこの論に対する反証となることを簡潔に示したい。テン語では hrŋk の声母 h はちゃんと発音される (少なくとも私が個人的に知っているフキ (Phu-qui。ゲアン (Ngẽ-an) 近郊の集落ではそうである) し、現地の人は自ら私に声母 h のある hrŋk “6” と h のない rŋk “ヒキガエル” の違いを示してくれた。

- (13) カールグレン氏の Analytic Dictionary. p.54 (série 68 「黒」) では「派生の接頭辞 m で形成される」と述べ、逆に *m-χŋk と仮定している。
- (14) この段落の例は『詩経』と『礼記』から採った。
- (15) 古代チベット語は動詞の様々な語形のために母音交替のシステムを同様に有していた。古代の文法家にとってサンスクリット語の動詞の時制を訳すのに役立ったのはこのシステムである。

	完了	未来	命令	現在
する…	bya-s	bya	byo-s	byed-pa
考える…	b-sam-s	b-sam	som	sem-s-pa
取り除く…	b-sal	b-sal	sol	sel-wa
学ぶ…	b-slab-s	b-slab	slob	slob-pa
測る…	d-pag-s	d-pag		d-pog-pa
試す…	d-pyad	d-pyad		d-pyod-pa
食べる…	b-za-s	b-za	zo-s	za-wa
離される…	bral		brod	'-bral-wa
引っ掻く…	brad		brod	'-brad-pa
与える…	gnan-s	gnan	gnon	gnan-wa

現代語にはその痕跡しか残っていない。いくつかの命令形と個別の語だけである。口語やビルマ語のように、それらは小辞を使いチベット語は完了形の語幹から出発して他のある種の屈折で構成される。

- (16) しかしながら、鼻音または -l- の前の接頭辞は去声の語に発生しないことを注しておかねばならない。恐らく閉鎖音声母の前の成節的な接頭辞 (kǎ-, gǎ-, bǎ- など) の影響と、鼻音あるいは l の前の非成節的な接頭辞 (k-, g-, p-, b-, s-, χ- など) の影響とを区別しなければならないであろう。
- (17) 後に派生の主要な要素となった声調交替に由来するこの二次的な特徴は興味深い事実を教えてくれる。すなわち、単なる声調交替による派生は、一般に第三声 (去声) の語に起こるのに対し、語の声調が元々何であろうとも、接頭辞化による派生においてはほぼ常であるように、逆に無声音声母が有音に変わる、或いはその逆の交替による派生では、もしその語が元々第一声 (平声) ならばそれを第二声 (上声) に変え、それがもし第二声か第三声ならばその語が変えられることはない。もちろんここでは声調そのものの起源を扱うわけではないが、とりあえずは、完全に構築された声調システム内での交替および中古中国語の交替との類似が問題である。

注

- * 1 以下、表に対しては原文にはない番号を補った。
- * 2 声調記号は原文のまま。1, 2, 3, 4 がそれぞれ平声, 上声, 去声, 入声を表す。右上にある場合は陰調, 右下にある場合は陽調である。
- * 3 原文では ñ という記号であるが訳文では ŋ とする。以下同。
- * 4 原文では ʔ であるが訳文では ʔ を用いる。以下同。
- * 5 「泣」は有気音であるから本来は k'i' であろう。

- * 6 原文ママ。
- * 7 原文は「5」とする。
- * 8 原文は声調番号を右下に付す。
- * 9 原文に漢字はないが意味 (voltiger “虫や鳥が飛び回る”) と表 4 から補った。
- * 10 原文は声調番号を右下に付す。
- * 11 原文は声調番号を右下に付す。
- * 12 原文にアスタリスクが欠けていたため補った。以下の「頰」「俗」「恤」も同様。
- * 13 原文は「ゝ」を欠いていたため補った。
- * 14 本文は漢字を「淳」に誤る。いま「涼」に改める。
- * 15 原文ではゐが e である。また原文は声調記号を上付の「5」とする。
- * 16 原文では声調記号が下付である。
- * 17 原文では o の前の点は有気音を示す「ゝ」であるが訳文では「ゝ」に改めた。「飲」に関するこの行の表記はすべて改めてある。
- * 18 原文は「ゝ」という記号を付している。「ゝ」に改めた。
- * 19 原文は *puöŋ¹ とする。今 n に改めた。
- * 20 原文は「3」の声調標記を欠く。